

男女別・5才毎基準による若年女性の早期血糖異常の発見

○鑄城 由貴、石井 佐登美、宗像 ゆかり、遠藤 光恵（財）郡山市健康振興財団
大櫛 陽一（東海大学医学部基礎医学系）

【目的】

糖尿病は自覚症状のないことが多く、健診で見つかることの多い疾患である。全国70万人の健診結果から設定した男女別・5才毎の基準範囲を用いると、若年女性において2型糖尿病の早期異常が見逃されている可能性が示唆された。全国と比べ、当施設においての見逃しの可能性がないか検討を行った。

【対象と方法】

平成7年～平成16年に事業所健診を受診した20才～34才の女性6276人（延）のうち、空腹時血糖が100～109mg/dlの354人（延）のクロス集計を実施し、さらに複数年受診者200人（実）の男女別・5才毎の基準による時系列グラフを用いて動向をまとめた。

【結果】

●クロス集計

年齢(才)	見逃し人数	当施設 見逃し率	全国の 見逃し率	結果
20-24	69人	4.5%	4.9%	全国より少し低い有意差なし
25-29	92人	4.5%	5.1%	全国より少し低い有意差なし
30-34	197人	7.2%	5.9%	カイ2乗検定で有意差あり全国より多い(P<0.01)

●男女別・5才毎基準による時系列グラフの動向

- 1) 年齢基準の上限値で経過・・・ 39人(19.5%)
- 2) 上限値からそれ以上に上昇・・・ 54人(27.0%)
- 3) 上限値より急に標準内に下降・・・ 8人(4.0%)
- 4) 標準内に下降・・・ 99人(49.5%)

【考察】

空腹時血糖における若年女性の見逃し率は全国と比べほぼ同じ傾向であり、特に30～34才では見逃し率が高値であった。また、男女別・5才毎の基準による時系列グラフの動向においては、約半数が基準の上限付近から上昇の推移を示し、同年齢の中でも高めの値で経過していた。さらに、上限値から急に標準内に下降した事例では、少数ではあるが値が高くなってきた時点で生活指導の介入や運動習慣などライフスタイルの変化が見られた。

当施設では、全年齢に対し空腹時血糖の109mg/dlまでを異常なし、126mg/dl以上を要精密検査としているが、従来の基準によると、今回検討した対象は全て「異常なし」となり、健診を受けていても2型糖尿病の早期異常発見が遅れる可能性が考えられる。アメリカ糖尿病学会においても、境界型糖尿病の空腹時血糖値が110mg/dlから100mg/dlに変更された。ここで注目したいのは、約半数が標準内に下降しているところで、この対象においての復元力を示しており、この時期におけるアプローチが重要であると考えられる。

今後、OGTTやHbA1c、インスリンの測定を行い、見逃されている対象がインスリン抵抗性あるいは低インスリン性であるのかを追跡することで、2型糖尿病の早期発見につなげたい。

—— 現在、この対象の中から協力を得られる方について、OGTTやインスリンの測定をし、見逃されている対象がインスリン抵抗性あるいは低インスリン性であるのかを追跡調査中である。